

足立 文彦教授の紹介

足立文彦教授は、2015年3月31日をもって金城学院大学現代文化学部を定年によりご退職されました。

先生は、1997年4月に現代文化学部教授として着任されました。南山大学経済学部（1976-1989）、名古屋大学経済学部及び同大学大学院国際開発研究科（1989-1997）での研究・教育経験を生かして、新設の現代文化学部・国際社会学科の教育に参画することが、「人生の節目でのチャレンジだった」とおっしゃっています。新学部の国際化・情報化・福祉社会化を三本の柱とする理念に強く共鳴するものがあったそうです。



着任後3年目から2期4年にわたって、国際交流センター長として、留学制度の拡充に努められ、今日の国際交流隆盛の基礎をつくったと自負しておられます。その後、教務部長1期半（3年）と、学部長を1期2年つとめられ、「学部内の教務委員も教務委員長も経験しないままに、いきなり教務部長に選ばれ、大変だった」と回顧しておられます。GPA制度の導入、履修登録のCAP制の導入などが思い出に残っているそうです。

先生は開発経済学が御専門で、アジア経済論、人間開発論等の研究成果を教育に生かすべく、常に研究・教育・交流の三つの柱を意識しながら教員生活を送ってこられました。

研究分野では、「アジア諸国における自動車国産化過程の比較研究」、「日本企業の海外進出」、「日本の中小企業の国際化」、「日本の経済協力」、「内発的発展の成功事例としての一村一品運動」等の研究に取り組んでこられ、数々の国際会議での発表によって、国際研究交流にも尽力してこられました。

教育面では、開発経済学とアジア経済論の延長線上で、本学着任後、国連開発計画が提唱する人間開発の概念に関心を持たれ、1990年以来毎年刊行されてきた『人間開発報告書』の内容を、『人間開発報告書を読む』という教科書としてまとめ、講義に使用されてきました。「いささか難解を承知で採用した教科書によって、アジア・貧困・援助等のテーマに関心を持つ学生が育ったことがうれしかった」と語っておられます。

教育と交流を一体化するプログラムとして、国際情報学部のK I T（Kinjo International Training）タイ・プログラムに先駆け、2001年から09年にかけて5回の東南アジア研修旅行を実施し、多くの学生をタイ、シンガポールなどに引率されました。

先生は、これまでの経験を生かし、アジアの人々へのお礼の気持ちを込めて、定年後はアジアの大学でボランティアとして教鞭をとりたい、と準備されています。

アジアと日本の懸け橋としての、先生のますますのご活躍を祈念いたします。